

特別小特集

情報通信分野のグローバル化にどう取り組むべきか？

——外から見た我が国のICT産業とR&Dへの期待——



編集にあたって

編集チームリーダー 三宅 功

我が国の情報通信産業の国際競争力の低下が喧伝されている。要因の一つは世界のグローバル化の状況に技術開発、産業が適応できていないことが考えられる。これは、我が国を取り巻く世界のグローバル化の動きを十分に認知できていなかったことに起因するともいえる。冷戦の終結以降、この20年間で世界の状況は大きく様変わりした。市場主義経済が世界共通のルールになるとともに、EUの統合、米国を中心とした新たな金融ビジネスモデルの発達、あるいは中国、インドをはじめとした新興国の台頭といった大きな変化がグローバル市場で立て続けに起こった。インターネットや携帯電話の普及、あるいはコンピュータをはじめとするITシステムのダウンサイジングといったICT技術の飛躍的発展がこのような大きな変化を加速したことは間違いない。一方で、我が国の情報通信産業は、世界第2位のGDPという国内市場に固執し、あえてグローバル市場に打って出るリスクを回避し続けた結果として、グローバル市場での地位を低下させてしまったというのが大きな流れのように思える。しかしながら、中長期的展望に立てば、これからの20年間、ある意味過去の遺産で辛うじてその地位、技術を保持できていた状況が続くとは考えにくい。既に中国のGDPは我が国を逆転して第2位の地位に達し、20年後には我が国の4倍に達するとの見方もある。片や、我が国は少子高齢化の道を突き進み、肝心の若者世代には不況のしわ寄せによる雇用不安が襲いかかっている。これらを考えれば、やはり急拡大しつつあるグローバル市場と折り合いを付け、グローバル市場での地位を再構築する以外にないであろう。そのために

は、現実を直視し、我々を取り巻く外部環境の変化を客観的に理解し、これに柔軟かつ大胆に適応していく自己改革を進めていくことが必要である。

本特別小特集では、海外からの視点でそれぞれの国、企業がグローバル化をどう捕えているか、また我が国の情報通信技術と産業のステータスがどう見えているかを忌憚なく語って頂き、今後の我が国の情報通信産業とそのR&Dの進むべき方向を考える参考にして頂くこととした。そのため、日本とかかわりのある海外のICT企業・学術機関でグローバル市場に直接的に関係しながら御活躍されていると同時に、我が国の実情にも通じた方々に執筆をお願いした。

昨今接する、国内の有識者の間で行われるグローバル化議論に対しては、正直に言えば、評論家的であり、生々しい現実との距離がある、あるいは内向な議論であると感じている。これはグローバルビジネスの現場を実際に経験して得られる生々しさが不足していること、あるいは現実のグローバル市場の状況認識が不足していることに起因しているように思えてならない。今回執筆をお願いした方々にはそのようなギャップを埋めて頂くことを期待した。中には編集者の期待どおり、かなりの苦言を呈して頂けた方もいる。また、一言でグローバル化といっても、単に製品の市場優位性、財務的成果を挙げることだけが目的ではないはずである。グローバル市場の中で我が国の立ち位置を明確にし、尊敬される立場を築くことを通じて、グローバル市場そのものに貢献することも重要である。このような観点での御意見も幾つか取り上げさせて頂いている。本特別小特集を通じて、読者の方々にグローバル化に対する多様かつ現実直視の視点を多少なりとも持って頂ければ幸いである。

特別小特集 編集チーム	三宅 功 安藤 淳	牧野 光則 荒川 賢一	笹山 浩二
----------------	--------------	----------------	-------